

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13295

研究課題名（和文）ヒマラヤ山間部における車道建設の人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study on Road Constructions in Mountainous Terrain of Himalaya

研究代表者

古川 不可知（FURUKAWA, Fukachi）

九州大学・比較社会文化研究院・准教授

研究者番号：00822644

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ネパールの山岳観光地域における車道建設が沿道の社会と実践に与える影響を明らかにすることである。また新型コロナウイルスの流行に伴い、コロナの流行がネパールの山岳観光にどのような影響を与えたのか、および日本における山岳観光はいかなるインフラによって支えられているのかを研究目的に追加した。研究期間中には三度のネパール調査を実施し、ネパール山間部では車道が希求され、その変化は従来の生活と連続的なものと語られていること、またコロナ後に観光客数は回復したものの、とりわけ高地の村で従来見られない人口流出が起きていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来の移動研究ではさほど注目されてこなかった移動の微視的側面を、車道建設およびそれに伴った変化の渦中にある社会と実践への参与観察を通して描き出す点にある。このことは、急速な道路網の整備が進むネパールにおいて、道路が沿道社会に対して及ぼす影響を明らかにする点で社会的に重要な意義も備えている。また山がちな環境化で進行するネパール・ヒマラヤのインフラ開発の事例は、対照的にインフラの老朽化が進む日本の山間部のあり方を考えるうえでも有用な知見となるだろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to elucidate the impact of road construction in the mountain tourism areas of Nepal on the local community and people's practices. Additionally, due to the COVID-19 pandemic, I have added research objectives to investigate how the pandemic has affected mountain tourism in Nepal, and what infrastructure supports mountain tourism in Japan. During the research period, three times of field research was conducted in Nepal, revealing that roads are desired in the mountainous regions of Nepal and the changes caused by roads are seen as continuous with conventional ways of life. Furthermore, it was revealed that while the number of tourists has recovered after COVID-19, unprecedented outmigration is occurring in highland villages.

研究分野：文化人類学

キーワード：インフラストラクチャー 車道 ヒマラヤ ネパール 観光

1. 研究開始当初の背景

いわゆるグローバル化の進展により、人間の移動はこれまでになく顕著な現象となった。文化人類学分野においても、移民や観光をはじめとする様々な移動について論じられてきた。しかしながら従来は、そうしたグローバルな移動がどのような物理的構造によって可能となっているのか、人々は実際にどのように自らの身体を用いながら移動していくのか、また新たな移動手段の導入が沿道の社会や人々の実践へどのような影響を及ぼすのかといった、移動の微視的な側面についてはさほど注目されてこなかった。

他方でネパールの山間部では、車道は「発展」と結びついて想像され、その開通が待望されてきた。山岳観光のメッカとして世界中から観光客を集めるソルクンプ郡では、とりわけ2015年のネパール大地震以降に南部のソル地方から急ピッチで車道の建設が進められるようになった。こうした車道の建設が現地の社会や実践、また観光産業にどのような影響を与えるのかを明らかにすることは、急速な道路網の整備が進むネパールにとって喫緊の課題である。また運転/乗車して移動する実践を身体の観点から考察することは、モータリゼーションが行き渡った一方で、高齢化社会の進展によって移動者の身体が老いつつある現代日本における車のあり方を考える手がかりともなりうる。

ただし本研究の開始直後より新型コロナウイルスの世界的な流行が発生し、当初計画通りのネパール調査が不可能となった。そのため、日本の山岳地帯における山岳観光とインフラ管理についての現況調査をおこなってネパールの事例との比較資料を収集することとした。また2022年夏にネパール渡航が可能になってのちは、新型コロナウイルスが山岳観光に与えた影響を調査する必要性も生じた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ネパールの山岳観光地域における車道建設が、沿道の社会と人々の実践に与える影響を明らかにすることである。具体的には、-1 山間部の車道はいかに作られてゆくのか、-2 車道によって観光客や住民の流れがどのように変化するのか、-3 新たな車道は人々の実践にどのような影響を与えるのか、および -4 山村社会は車道開通によっていかなる変容を遂げるのか、フィールドワークを通して明らかにする。

また新型コロナウイルスの流行による計画修正に伴い、コロナの流行がネパールの山岳観光にどのような影響を与えたのか、および日本における山岳観光はいかなるインフラによって支えられているのかを研究目的に追加した。

3. 研究の方法

フィールドワークを主たる方法論とし、車道の建設現場、沿道の村落、および車両による移動の実践について参与観察とインタビューを実施する。当初はソルクンプ郡ソル地方とマナン郡アンナプルナ地域のネパール二地点間の比較を通しての目的を達成する予定であったものの、ネパール調査の見通しが立つまでは日本国内の事例を収集することとし、アンナプルナ地域に替えて北アルプスと九州の山間部を調査地にの現地調査を実施した。コロナの収束後は、ソルクンプ郡ソル地方にての調査を、またクンプ地方においてインタビューを中心にの調査をおこなった。

4. 研究成果

本研究期間中には、2022年8月10日～30日、2023年2月22日～3月12日、および2024年3月3日～3月23日にかけて3度、ネパールのソルクンプ郡にて現地調査を実施した。また2020年4月から断続的に九州の山岳地帯の調査を実施し、2022年9月および2023年9月には北アルプスにて調査をおこなった。以下、成果を既述の目的に沿って説明する。

ネパール・ソルクンプ郡の車道建設とその影響

-1 ソルクンプ郡では南部のソル地方から車道の建設が進んでいる。山間部の車道は発破と重機による開削がおこなわれたのち、人手によって石畳への舗装がおこなわれる。工事主体は郡政府となり、重機による開削を地域外の企業が実施したのち、地域のリーダーが石畳への舗装を請け負い、村人を動員して実施する。地勢の不安定な山間部の工事は必ずしも計画通りに施工されるわけではなく、斜面の状況に応じて現場の裁量で形が変わってゆくことが観察された。

-2 開通した車道にはまず二輪車が走り、続いて乗合ジープが運航を始める。2019年春に車道が到来したソルクンプ郡ソル地方のカリコーラ村では、2023年3月の時点で35台の二輪車が保有され、4台の乗合ジープが運航するようになっていた。トレッキング客は現時点では空路を選択するケースが多いものの、その時点で車道末端を起終点として首都とのあいだを乗合ジ

ープで往復する観光客も増えている。また沿道住民は、従来は徒歩でしかたどり着けなかった郡庁への移動手段をほとんど車両へと切り替えていた。

-3 ソル地方の男性たちは車道建設が進行するに伴って、トレッキングガイドやポーターの仕事から、乗合ジープの運転手や道路工事の仕事に現金収入の軸を移す動きが観察された。ここで乗合ジープは顧客を連れて目的地に至る仕事としてガイドと類似のものと語られ、道路建設もまた日当制の非熟練労働としてポーター収入を代替するものと語られており、車道の開通による生業の変化は必ずしも断絶ではなく、既存の生活の連続線上に捉えられていることも看取された。

-4 森林が伐採されて山道が土の路面の車道に変わるなど村落の景観は変化し、開通した車道沿いに店舗やロッジの移築が進むなど村落の中心地が車道の周囲へと移りつつあった。またかつて森だった場所がビューポイントとして人の動きの結節点として栄える一方、ルートから外れた位置のロッジ経営者などからは車道に対する皮肉めいた語りも聞かれた。

ネパールの山岳観光に対する新型コロナウイルスの影響

ソルクンブ郡北部のクンブ地方では、2023年にはトレッキング客数の水準がほぼコロナ前の水準にまで回復していた。またクンブ地方ではコロナ下の観光客不在の時期に山道の拡幅と舗装が進み、規格化されたセメントの階段などが急増した。加えて従来は村民の流出が少なかったトレッキングルートからは距離のある村でも首都や海外への移住が進み、他地域出身者によるロッジ経営がおこなわれるようになるなど、コロナを契機に従来は見られなかった村落の変化が観察された。

日本の山岳観光インフラの現況

日本における山岳観光のインフラは多くの場合、周辺住民や山岳会、山小屋といったステークスホルダーの自主的な管理に任されているケースが多く、しばしば山道のメンテナンスが行き届いていないことを、聞き取りおよび観察から確認できた。九州の里山は管理がなされなくなったことで登山道が荒廃し、シカやイノシシによる獣害が観察される。また北アルプスなどの国立公園でも脆弱な管理体制やオーバーツーリズム、山小屋の人的資源不足などによる登山道の荒廃が起きる一方、近自然工法や登山者自身のボランティアによる登山道整備などの取り組みも見られた。ネパール・ヒマラヤの事例との比較は今後の課題としたいが、過剰とも見えるインフラ開発が進み、来訪者数が増加基調にあるネパールと、入山者が減少してインフラが衰退しつつある日本の山岳地帯の事例は、相互に対して有意義な知見を提供するものと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Furukawa, Fukachi	4. 巻 27
2. 論文標題 Disasters and Reconstruction in a Mountain Tourism Area: A Case from 2015 Nepal Earthquake in Solukhumbu, Nepal	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Global Environmental Research	6. 最初と最後の頁 125-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古川不可知	4. 巻 51
2. 論文標題 水と山と歩くこと ヒマラヤと水の物質性をめぐる断想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代思想11月号	6. 最初と最後の頁 176-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川不可知	4. 巻 26
2. 論文標題 ヒマラヤの山道と歩く身体的人类学 ティム・インゴルドによるメルロ=ポンティ理解を手掛かりに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 メルロ=ポンティ研究 26 91-108	6. 最初と最後の頁 91-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古川 不可知	4. 巻 22
2. 論文標題 ヒマラヤの山岳観光と複数の自然の邂逅	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化人類学研究	6. 最初と最後の頁 34～53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32262/wsca.22.0_34	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古川不可知	4. 巻 3
2. 論文標題 天候のなかに線を描く ティム・インゴルドの歩行論をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 たぐい	6. 最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 古川 不可知
2. 発表標題 戸外にあることの想像力 日本における登山とキャンプ、および人類学
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 ヒマラヤの村の「モータリゼーション」 (ネパール・)ソルクンブ郡ソル地方K村を事例に
3. 学会等名 日本南アジア学会第36回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 日本における大衆登山と人類学 今西錦司の探検とその落とし子たち
3. 学会等名 Approaching Modernity in Japan's Mountains (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 不確実な「自然」をガイドする ヒマラヤの山岳観光とリスクをめぐる冒険
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「観光における不確実性の再定位」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Furukawa Fukachi
2. 発表標題 Rapid Mountain Trail “Improvements” and Roadway Constructions in Solukhumbu.
3. 学会等名 1st Sustainable Mountain Development Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古川 不可知
2. 発表標題 登山とノの人類学 今西錦司を導きにヒマラヤと日本の「自然」を歩く
3. 学会等名 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・月例ワークショップ「山と歩くことの日本学 ポスト京都学派の生態学」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Furukawa Fukachi
2. 発表標題 Nepalese infrastructure from tourism perspectives: an anthropological reflection on the Everest trekking and trails.
3. 学会等名 Kyushu University Asia Week 2022: Nepal. Nepal-Japan connection through tourism (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 道という空間、歩くことの共同性 ネパール・ヒマラヤの山岳観光におけるモノ・制度・身体の偶然的な出会いについて
3. 学会等名 不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う モノ、制度、身体のからみあい
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 ヒマラヤ山岳観光のモビリティと斜めであることの質感 山間部の移動をめぐる変化と連続性について
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 FURUKAWA, Fukachi
2. 発表標題 Mountain Tourism, Environment, and Disasters in Khumbu, Nepal: From a Village 's Perspective
3. 学会等名 3rd GLP ASIA CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 ヒマラヤの山道と歩く身体の人類学 ティム・インゴルドによるメルロ=ポンティ理解を手掛かりに
3. 学会等名 メルロ=ポンティ・サークル 第27回研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 FURUKAWA, Fukachi
2. 発表標題 My Anthropological Fieldwork in Khumbu, Nepal
3. 学会等名 Nepal Forum: In search of possible collaboration between Kyushu University-Nepal (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 「自然」を案内する ヒマラヤ・トレッキングにおけるガイドの実践と環境認識
3. 学会等名 九州人類学研究会・沖縄民俗学会合同研究会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 山道を行き交う身体・モノ・観念 エベレスト南麓の山岳観光地域におけるモビリティと物質性について
3. 学会等名 京都人類学研究会11月例会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 「戸外にあること」の共同性をめぐる試論 登山とキャンプの比較を手掛かりに
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う モノ、制度、身体のかみあい」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 ヒマラヤを歩くことと生成変化する「自然」の境界 ティム・インゴルドの環境論を手掛かりに
3. 学会等名 現代文化人類学会シンポジウム Writing (Against) Nature: 「転回」以後の民族誌 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川不可知
2. 発表標題 道を作る、「シェルパ」になる –ネパール・エベレスト地域の山岳ガイドと「存在」をめぐる民族誌
3. 学会等名 AA研研究会「南アジア・ヒマラヤ地域から存在論的民族誌の可能性を探る」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 FURUKAWA Fukachi
2. 発表標題 Walking Body, Bodies as Infrastructure: On the Arrangement of the “Road” in Southern Foothills of Mt. Everest, Nepal.
3. 学会等名 IUAES Congress 2020 (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 古川不可知(編)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 280
3. 書名 モビリティと物質性の人類学	

1. 著者名 奥野克己(監修)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 192
3. 書名 世界ぐるぐる怪異紀行: どうして"わからないもの"はこわいの?	

1. 著者名 辻成史(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 400
3. 書名 はるかなる「時」のあなたに: 風景論の新たな試み	

1. 著者名 日本ネパール協会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 404
3. 書名 現代ネパールを知るための60章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------